

復原に関する助言・指導を現地においておこなった。

各地の文化財建造物の修復事業への助言・指導 光福寺（静岡県）、大阪中之島公会堂（大阪市）、山口県旧県会議事堂（山口県）、釣島灯台退息所（松山市）、西田橋（鹿児島県）などの保存修復にあたり、現地において助言・指導した。（木村 勉）

書跡資料の調査

南都諸寺所蔵の典籍文書の調査は、前年に引き続いて薬師寺、興福寺、法隆寺について調査を実施した。薬師寺は、経箱第25～28函について調査をおこない、第22、23函を写真撮影した。調査と併せて、DB化も第23函までおこなった。全体の調査はまだまだ終了しないが、次年度で、調査終了分については区切りをつける予定である。興福寺は典籍文書目録第三巻分にあたる経箱第61函以降である。現在調査中の箱は、第61、69、70函の調査をおこなっている。法隆寺は、記録文書の目録作りであるが、概ね出来上がりに近づいている。

南都以外では、仁和寺の御経蔵目録の第1分冊を、管理調査用の稿本として作成しつつある。現在調査は、文化庁や科研調査に協力するかたちで、奈文研及び奈文研OBが数人参加しているが、従来奈文研が調査してきた成果を資料の管理調査用に活用しようとするものである。その他、醍醐寺文書、石山寺聖教の調査をした。また、文化庁や教育委員会の依頼を受け、奈良東大寺修二会関係資料、滋賀永源寺文書、京都興聖寺一切経、東福寺文書などの調査に協力をした。

北浦定政関係資料では、北浦宅での補足調査や「平城旧址之図」の写本の調査をした。（綾村 宏）

埋蔵文化財センターの研究活動

埋蔵文化財センターの6研究室と情報資料室および各人がそれぞれの課題を定めて進めている研究があり、多くは前年から継続しているものである。1997年度には次のものがあり、そのうちのいくつかについては別頁で報告している（*印）。ここでは他のもののいくつかを紹介する。

全国不動産文化財情報システムの普及流通に関する調査研究/文化財情報ネットワークにおける通信法の研究/遺跡地図情報システムの開発研究/縄文編年の学史的な研究/東アジア古代都城の比較研究*/古代地方末端官衙

遺跡の調査研究/古代倉庫遺構の集成的研究/古代豪族居館遺跡の研究/動物遺存体による生業活動の復元的研究/遺跡土壌の微細形態学的研究/残存脂質分析による生活環境の復元的研究/古気候の復元的研究/年輪年代法による白頭山巨大噴火年代の解明/年輪年代法による弥生・古墳時代開始時期に関する研究/広域遺構探査法の開発研究*/東アジア古代の庭園遺構の比較研究/文化遺産の地域特性に関する研究/復原建物の構造安定性に関する研究/常時微動測定による古建築の構造に関する研究*/金銅製遺物の保存科学的な研究/飛鳥・藤原・平城宮跡等出土品の保存処理/東アジアの古代塑像・壁画の技法的研究/有機質遺物の材質分析とその保存処理法の開発研究*/劣化写真のデジタル画像による復原/解析図化システムによる文化財計測法の開発/南アジア仏教遺跡の研究/発掘調査支援機械システムの開発研究/陶磁器文化の交流に関する科学的な研究/日韓古代における埋葬法の比較研究

埋蔵文化財関係情報処理の現状 奈文研ホームページは、研究所による現在までの調査研究成果の公開と、平城宮跡の現況の紹介に特に力を入れて整備を続けている。外部からのアクセス件数も1カ月1000件を越えており、また、電子メールでの質問も受け付けているので、一般の人々に対する文化財の調査研究についての情報公開に大きく貢献していると考えられる。

全国不動産文化財情報システムの現状 インターネット経由でのデータベースの公開を始めた。校正用のシステムでは本年度も遺跡情報の収集を続け、データの変更・更新を行っている。要望の多い画像情報の取り込みについては、どのようにして実現するか、システムの検討を行っている。膨大な遺跡数を前にたじろぎながらも前進しているというのが実感である。

年輪年代法による白頭山巨大噴火年代の解明 中国北東部にそびえる長白山-白頭山（2,744m）の噴火による火砕流で埋没したマンシュウカラマツ樹林の炭化材のもつ年輪から、その噴火年代を明らかにしようとする研究である。10世紀に噴火したとされている白頭山の噴火年代が確定すれば、渤海国の滅亡との関係の有無や、その火山灰がわが国の東北、北海道へ飛来してきて遺跡に堆積していることから、それらの遺跡年代確定にも大いに役立つことになる。目下、中国科学院瀋陽応用生態研究所と共同で進めている。

金銅製遺物の保存科学的な研究 金銅製遺物のうち鍍金製品の鍍金層は数十ミクロン以下の薄層により形成されている。これらの保存にあたり、高吸水性ポリマーを利用したさびの除去が可能となり、また、多くの鍍金遺物の非破壊測定が可能となった。しかし、従来からの蛍光X線分析法ではX線的に無限層厚試料が定量条件となるため、出土遺物に適用することが困難である。本研究は平

行ビーム法X線回折測定による構造解析から同定をおこない、金と水銀の割合の推定をおこなう事が可能となることから鍍金技法の解明に大いに役立つ。(工楽善通)

国際学術研究

1. 国際学術交流の現状 当研究所がここ数年継続しておこなっている諸外国との共同研究には、特別研究として次の2件がある。

- 1) 南アジア仏教遺跡の保存整備に関する基礎的調査研究
- 2) アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力

また、文化庁が実施する「アンコール文化遺産保護共同研究」も当研究所で協力しており、本年で5年目を迎えた。さらに、文部省科学研究費補助金として次の4件を国際共同研究として実施している。

- 1) 中国古墳壁画の総合的調査と保存法の開発研究
- 2) 陶磁器文化の交流に関する科学研究
- 3) 中国長白山の巨大噴火年代と渤海に関する年輪年代学的研究
- 4) 日韓古代における埋葬法の比較研究

当研究所が外国の諸機関・研究者とおこなう交流も近年多岐におよび、ほとんど全世界的なものになってきた。1997年度には、当研究所が招聘した研究者、および先方の研究目的での来訪者は計14ヶ国、延べ53人であり、当研究所から外国への出張者は11ヶ国、延べ56人にのぼっている。来訪者は奈文研の特別研究、科学研究費国際学術研究、国際交流基金、日本学術振興会、ユネスコ、(財)日本国際協力センターの招きによるもののほか、先方機関からの訪問者である。

自治体職員協力交流事業特別研修 地方公共団体、自治省および(財)自治体国際化協会がおこなう「自治体職員協力交流事業」にもとづき、海外から文化財保護関係機関の職員を受け入れて、研修をおこなうもので、文化庁および諸機関が協力しているものである。当研究所も1996年度から受け入れを実施しており、本年は奈良県が受け入れた中国河南省文物管理局の1名と、鳥根県が受け入れたヴェトナムフェモニユメント保存センターの1名が9月8日から12日まで特別研修を受けた。わが国における文化財行政の現状、保存科学、遺跡探査等について研修をしたほか、平城宮跡、飛鳥藤原宮跡、飛鳥資料館等の見学をした。**〔財)日本国際協力センターが実施する「博物館技術コース」への協力** 標記の研修の一部を引き受けて、9月22日より9月26日までの1週間当研究所で実施した。内容は日本

の各種文化財の保存の現状や遺跡発掘、保存修復・整備、建造物見学などであった。参加者はインドネシア、カンボディア、サウディ・アラビア、シリア、カメルーン、セネガル、グアテマラ、ミャンマーからの各1名であった。このうち、サウディ・アラビア、カンボディア、インドネシアの3名は11月にも1週間、考古学と保存科学の特別研修を受けた。

2. 中国社会科学院との第2次友好共同研究 当研究所は、特別研究「アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力」の一環として、中国社会科学院考古研究所と共同研究を進めている。96年度は調査計画に関する協議を進めるとともに、国家文物局に対して漢長安城桂宮の発掘申請を提出した。97年度になって、ようやく発掘申請が国家文物局から批准され、共同調査が実現する運びとなった。発掘調査の申請者は奈文研の所長であり、中国における外国人調査の画期的な例といえる。調査対象となったのは漢長安城の桂宮2号宮殿遺址で、調査は97年11月～12月と98年2月～3月の2度に分けておこない、奈文研からは2名ずつの研究員を派遣した。また発掘区周辺の地形測量もおこなった。調査の具体的な成果については4～6頁を参照されたい。(工楽善通)

3. 南アジア仏教遺跡の研究 ミャンマー連邦文化省考古局との共同研究の4年目である。主として研究者の交流をおこなっている。本年は考古局パガン支局のゾー・ミョー・チョー氏、博物館局学芸員のティン・アウン・ソー氏を50日間、ヤンゴン大学考古学科長兼大学歴史研究センター副所長サン・ニエン氏を15日間招聘し共同研究を行った。奈文研からは、猪熊・黒崎・杉山・森本の4名が考古局、大学歴史研究センターと遺跡を訪れた。遺跡はマンダレー近郊のミンザイ、ハリンといった都市遺跡を中心に、整備が進むパガン地域なども訪れた。(森本 晋)

4. アンコール文化遺産保護に関する研究協力 現地調査では、ルンタエック村タニ窯跡群の本格的調査を目指した地形測量と遺構探査を実施した。探査では地中レーダー探査と磁気探査を行った。探査の結果については本書P.48-49を参照。招聘事業は例年通り、若手研究者3名を、81日間招聘し、発掘技術・保存科学的手法・日本文化理解の3点について、研究所を中心に共同研究を行った。中堅研究者1名の短期招聘では、文化芸術省文化遺産局次長のピッ・ケオ氏を招聘し、研究所や各地の寺社を視察していただいた。(杉山 洋)